
弟なヤツ

ふじたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
弟なヤツ

【Nコード】
N7200A

【作者名】
ふじたま

【あらすじ】
私が好きなヤツ…。真面目で秀才くんな彼は私の弟で初恋の人…。正反対な性格の義姉弟が織成すラブコメディです。

第一話 堅物なヤツ（前書き）

なんか無性に書きたくなっただんです。

他に連載途中なのがあるのに 能力不足なくせに手を広げちゃって
すみません

こっちはまったり更新していく予定ですの…
気が向いたら読んでやって下さいませ

第一話 堅物なヤツ

「姉さん。ちょっとどいてもらえませんか…?」

「無理！今使用中だもん」

「分かりました。ではもう結構です。」

…と 言うつと自分の手鏡で身だしなみをチェックした後スタスタと玄關に向い

「では行つて参ります。」

と、お母さんに向かつてきちんとお辞儀をして家を出て行く男の子。

ヤツの名前は 倉橋 秀人。16歳の高校1年生。いちおう私の弟だつたりする。

…血は繋がってないんだけどね。

私とヤツとの初めての出会いは 遡る事今から10年前…。

私が7歳。ヤツが6歳の時だつた。

私の母の再婚相手であり 現在私の父でもある『パパさん』の連れ子。それが 秀人だつた。

初めてあつた時のヤツの最初の一言。初めて交わした挨拶に びつくりしたのを覚えてる。

「はじめまして…。倉橋秀人と申します。よろしくお願い致します」

そう言つて ペこりと頭を下げた仕草はとても私と、その年の変わらない少年のものとは思えない程 異様に大人びた雰囲気を感じていた。

私 この子とうまくやっていけるのかなあ？

…と子供心に 当時7歳の私は不安になったりしたのだった。

「雪音！アンタいつまで鏡と睨めっこしてるのっ？！早くしないと遅れるよっ！秀人はとっくに出かけたってのに…」

おつと…いけない。昔を思いだしてたら ついボケつとしちゃってたよ。

母に怒られ、仕度する手を早め 急いで髪を整えた。

あつ！忘れる所だった 肝心な自己紹介がまだでした。

ん？誰に紹介するのかつて？

…そんな細かい事気にしない気にしない（笑

私の名前は 倉橋 雪音。^{くらはし ゆきね} 17歳の高校2年。身長は平均。体重も平均……だと思いたい。因みに顔も平均…

というか…自分で自分を可愛いと言える程の自信は持ち合わせてないし…。

一応 ちよつと偏差値高めな進学校に通つてたりするんだよね。
まあ私の場合はギリギリ合格って感じだったんだけど…。

勉強嫌いな私が なんでそんな進学校を受験したかっていうと…

原因は ヤツだったりする。

ヤツと…

シユウと同じ学校に行きたかったから…。

シユウは 出会った頃から 頭もよくて何処か大人びてて、一言で
いうと 名前の通りの秀才っていうヤツだった。

ヤツの秀人って名前は パパさんが付けたらしいけど、まさにその
通りに育ってパパさんも本望だろう。

そのシユウは 小学生の頃から行きたい高校 大学 果ては、なり
たい職業まで決めており 既に人生のビジョンってヤツをしっかりと
と見据えていた。

その高校が 現在私とヤツの通う 望海高校だったって訳。

…で なんで ヤツと同じ学校に行きたかったかっていうと…

うん… まあ その…

ヤツが…シユウの事が好き… だからデス。

一体 いつから好きなのか自分でもよく分からない…。

でも 確か はっきり自覚したのは 中2の時だった気がする。

あれはバレンタインデーの日…。

中学に入って背も伸び 顔も少しひき締まって身内の鼻眉目で見ても格好よくなったシユウは袋一杯のチョコレートを下げて帰って来た。

それを見て 私は ヤツが以外にモテるという事実にびっくりしたのと同時に、シユウを他の誰かに取られたく無いと思っている自分に気付いたのだった。

もし ヤツがそのチョコレートを渡した人の内の誰かと付き合う事になったら…
なんて考えると胸の中がもやもやした気持ちで一杯になった。

まあ 当の本人は 学校にチョコを持ってくるなんて…。とかバレンタインなんてチョコレート会社の陰謀だ…とかぶつくさ言っていて全然関心無かったみたいだったケド。

そんなヤツが学校でチョコなんか受け取る訳もなく…。
どうやら チョコレートは机や下駄箱に押し込まれていたりと無理やり渡されたものらしかった。

まあ 無理もないかな…。ヤツに直接チョコを渡す勇氣のある子なんてそうそう居ないと思うし…。

秀人は恋愛というものに興味がないらしく。 他人…特に女の子に
対して、無愛想というか無関心というか…
自分から特に用がない限り話かける様な事は無かった。

その上 すごく真面目な性格で物事の倫理をとて重んじている。
要は堅物ってヤツなのだ。

とにかくとつつきにくいヤツ…。
だけど何故かモテるんだよね…。

眼鏡の奥の切れ長の目…。
それに時折 家族や友人の前で見せる無邪気な笑顔。 どうやらその
ギャップに女の子は惹かれるらしい。

そういう 私もそうだったりするし…

「雪音っ！アンタまだ居たのっ！？遅刻しても知らないわよっ」

ハッと母の声で 我に返ると…

ヤバッ 後10分しかないっ

雪音の家から学校まで歩いて20分かかる。

どーしよっ！遅刻したら 大変だよっ！

雪音は 急いで用意を済ませると 家を飛び出し 肩まである髪を揺らしながら走りだした。

「ヤバッ 間に合わなかった…」

ガシャン

急いでダッシュして来たにもかかわらず 私が門につく直前で無情にもチャイムがなり

風紀委員によって門が閉められてしまった。

ちよつとぐらい待ってくれたっていいじゃん…

私が半泣きになりながら肩ではあはあ息をしていると 背後から聞き慣れた声が聞こえた。

「だからいつももつと余裕を持って家を出た方がいいと言ってるじゃないですか…」

私がバツと振り返ると そこには見慣れたヤツの顔…

「丁度良かった…。シュウ。あんたなんとかしてよっ　今月これで3回目だから遅刻になっちゃうとヤバいのよ…」

ウチの学校では　チャイムと同時に校内に入らないと遅刻になり毎日　風紀委員が門の所で遅刻者を厳しくチェックしている。

その上　月に遅刻や無断欠席を3回以上になると反省文を書かなくてはいけなくなるのだ。

「風紀委員長の僕が身内だからといって特別扱い出来る訳がないでしょう？そんな事では他の委員の方々に示しがつきませんよ。大体姉さんは、いつもいつも…」

ああ　またいつものお小言が始まっちゃったよ…　これ長いんだよね…

因みに　どうして一年のコイツが風紀委員長なのかというと…
委員長を決める会議の時に何故かまだ一年である秀人の名があがり全会一致で決まったらしい。

真面目を絵に描いた様な奴だしなあ。

風紀委員なんてぴったり過ぎ…

そんな事を思いながら　秀人の顔を見ていると…

「姉さんっ　ちゃんと聞いているんですか？」

…と　いきなり顔を覗きこまれた。

うわぁ…　近いっ近すぎっ　いきなりすぎるよぉ…

自分の顔が赤くなるのが分かる。

「ん？姉さん？どうかしました？なんか顔赤いですけど…風邪ですか？」

なんて言っておでこに手を当ててくる。

「だっ大丈夫だからっ」

いきなり触って来ないでよぉ～

普段一緒に暮していてもこういう突然の行動にはいつもドキッとしてしまう。

まあ　でも　コイツはきつと　何とも思っていないんだろうなぁ…。

そう思うと何故か無性に腹が立ってくるし…

「エイッ」

なんかむかついたからデコピンしてやったら…

「いきなり何するんですかつ」

やっぱり怒られた。

「あははっ　じゃあねえ」

また　長いお説教が始まらない内に　私は校舎に向かって走って逃げ出した。

「後で反省文持って僕の所に来て下さいね」

…

…背中からなんか聞こえた気がするけど…

聞こえなかった事にしよう…うん。

第一話 堅物なヤツ（後書き）

読んで頂き ありがとうございます。

第二話 説教するヤツ（前書き）

前回分 間違いが何カ所か…
すみませんでした。

第二話 説教するヤツ

「ごめん… 今日ちょっとまだ帰れない…。先に帰ってて…」

放課後 私はいつも一緒に帰っている友人に謝っていた。

「あゝ。反省文書かされるんだっけ？しかも弟に…（笑）」

「うん…。アイツったら見逃してくれないんだもん。薄情なヤツ」

「まあ…あのシュウ君だしねゝ 見逃してくれるなんてありえないでしょ…」

シュウの真面目すぎる性格は校内では有名な話で、影では

「堅物くん」なんて呼ばれていたりする。

ちよつとの校則違反でも厳しく取り締まるから 恨まれたり疎まれたりする事もあるみたい。

でも、人にどう思われても 自分の意見を曲げたりしない。

やっぱヤツは 強いんだと思う…。

ケンカが強いとかじゃなくて 心が…。

「まあ…頑張ってねゝ 私これからデートだし そろそろ行くわ…。」

「うわっ！いいなあ。これからデートとか言ってみたい」

高校に入った時 たまたま同じクラスになった友人 あくちゃんこと

「渡辺梓」

は サバサバした性格で 私がドジツたりすると 笑いながらもきちんとフォローしてくれる。

そんなさっぱりした性格で頼れるジュンちゃんが私は大好きなのだった。

あくちゃんは今、年上の大学生と付き合っているらしい。

会った事はないけど写メを見せてもらった感じでは格好良くて大人な感じの人だった。

大人びたロングの髪で綺麗なあくちゃんとお似合いで、並ぶとまさに美男美女って感じなんだろうなあ…。

「あんだだって、愛しのダーリンと反省文デートじゃん」

「うわっ ちょっとダーリンって何っ？！しかも反省文デートって…。なんかヤダ」

「だって好きなんでしょ。シュウ君事…」

「うっ…うん」

「よしっ じゃあ頑張って来いっ」

あーちゃんが私の背中をバシッと叩いた。

「頑張るって何を頑張れってのさあー？ ヤダなあ…反省文苦手なの…」

自然と溜め息がこぼれてくる。

「何って…あんたの魅力をアピッてシユウ君の心をガシッと…」

「あーちゃん…私の魅力って何かなあ…？」

はつきりいって 自分に魅力なんてもんがあるとは思えない…。
遠い目をしつつ あーちゃんに聞いてみる。

「うっ… そ そういう事は自分で考えなさい。 ……うん。大丈夫だって、人間 誰しもどっかしら魅力はあるもんだわ…」

あーちゃん… 微妙に逃げなお答えありがとう…

「無理だよ。アイツ恋愛なんて全く興味ないし…。しかも私の事ただの姉としか見てないよきつと…」

なんか自分で言ってるんだか悲しくなってくるなあ

「うーん…でもシユウ君だって男なんだし…。 ……まさかっ?! あ

「つち系なのかなっ？」

「え…？あっちって…？」

どっち？…なんとなく予想出来たけど、ちょっと現実逃避してみた…

「だから…男の人しか愛せない…みたいなの？」

言いながら あ〜ちゃんはちょっと楽しそうに笑う。

「えっ！？シユウがっ！？そんなのヤダなあ〜」

ただでさえ 手が届きそうもないのに…

もし そうだったら私が男に性転換するしか…

「なにを勝手に変な想像してるんですか…？」

「っ？！」

私があらぬ想像をして思いつめていると、背後から声が降ってくる。

「え…？シユウ…？アンタいつからそこに…？」

うわっ なんか変な汗出てきた。

「つい先程ですが…。というか姉さん何勝手に変な話してるんですか？僕にその様な趣味はありませんので…。そもそも今は恋愛など

にうつつを抜かしている場合ではありませんし…」

はあゝ 良かったあ

とりあえず そっち系ではないのね…。

…って ちよつと待ったっ 今 さり氣にショックな言葉を聞いた
ような…。

やっぱ 恋愛に興味なしか…。

喜んだり落ち込んだり 私が百面相をしていると あゝちゃんがシ
ュウに声をかける。

「ごめんね。シュウ君。ちよつと冗談で言ってみただけだから…」

「言っていい冗談と悪い冗談があります。」

「はい…。…ごめんなさい。…で、その前の話は聞いてない…です
よね？」

あゝちゃんが話しててたじたじになるのなんて きつとシュウぐ
らいだろうな…

反論などさせないというような威圧感がシュウにはある。

「僕が来た時には今の話題でしたよ。」

…このまま話させておくと良からぬ噂を立てられそうだったので止
めさせてもらいました…。

お話の最中にお邪魔しまして申し訳ありません。」

そう言つとシュウがぺこりと頭を下げる。

良かった…

シュウを好きつて話はとりあえず聞かれてないらしい。

「いえいえ…。こちらこそごめんなさい。

…あつ！冬音。私そろそろ行かなきゃ…」

えっ？！あゝちゃん？このタイミングで帰っちゃうの？

「じゃあね～」

あ… 行っちゃった。

「姉さん…」

呼ばれて 恐る恐る顔を上げる。

「なっ何かなあゝ？」

なんてとぼけてみたけど…。うっ やっぱ怒ってますよねえ？

「今後人の事を憶測で話したりしない様に…。人によっては傷つく人だっているのですよ…。」

「はい…。すみません」

「…で、姉さん。朝のでこピンの件ですが…。」

うあつ　覚えてたのかっ!?

「すみませんでした。」

「大体姉さんはいつも後先考えずに行動し過ぎなんです。もっと自分の行動に責任をもってですね…」

うわあゝ　また始まっちゃった。こうなったら　私は　ハイって言いながらひたすら頷く事しか出来ない…

「…ですので、今後気をつけて下さいね。」

「…はい」

ふうゝ　やっと終わった。

「では、反省文。書けたら生徒指導室までもって来て下さいね」

おっ 鬼いいゝゝ！

結局 私はこの日 どつぷり日が暮れる頃に やつと家路についた。
もちろん 帰り道の間中、反省文の誤字についてのシュウのお説教
を聞かされたのは言うまでもなく…

第二話 説教するヤツ（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
また 書きたくなったら更新します。

第三話 鈍いやつ（前書き）

間あけ過ぎですね…
すみません

こんなやつですが見捨てないでやって下さいませ（笑

第三話 鈍いやツ

みーん みんな みーん…

夏です。夏休みです。

夏休みと言えば…

海にプールにスイカ割り…

花火大会に夏祭り…

楽しいイベント目白押しで…

朝寝坊… 夜更かし 睡眠パラダイス

…な ハズ…

…ですよね？

なのに… 何故？

私は朝っぱらから勉強なんかしてんのよー！

「姉さん…。手が止まっていますよ…」

私をこんな状況にした元凶… シュウがシャーペン動かす手を止めて言う。

朝

コンコン

コンコンコンコン

ガチャ

「姉さん…。いつまで寝てるつもりですか…？」

「ん…？何い…？シュウ…？いま…何時い？」

夏休みに入り 朝寝坊する気満々で 昨日遅くまでマンガを読み漁っていた私。

当然起きれる訳も無く…。

「もう9時ですよ…。」

一体何時まで寝てるつもりなんですか？」

ちよっと呆れたような口調でシュウが聞いてきた。

「9時っ?!まだ朝じゃん…。昼まで寝るつもりだったのにいゝ。
なんで起こすのよ」

ああ… 眠い…

眠すぎる…

再び 枕に顔を埋め二度寝の体制を取る私…。

「ちょっと…姉さんっ!起きて下さいっ」

シュウが近寄って来て枕を奪って私のベットの脇に座った。

「昼って…。そんなんじゃ だらだらと一日が終わっちゃいますよ
…。大体夜早く寝ないからいけないんですよ…」

…。

……近いから…

このまま寝たら 寝顔見られちゃうじゃん…。

一緒に暮らしてはいるものの コイツの事を好きだと意識してから
どうも近くで顔を見合わせるのが恥ずかしい…

赤くなる顔を押さえつつ　仕方なく起きあがった。

「わ…わかったわよ。起きればいんですよ。起きれば…。」

もう…。なんでコイツはこんな真面目なのよ。

夏休みくらいハメ外せての…。

ぶつくさ言いながらやっと起きた私に…

「では、着替えたら下に降りて来て下さいね。

あつ！朝食を食べたら勉強ですからね。朝の涼しい内に勉強しないと…」

…と　堅物くんシュウの一言。

ゲツ　勉強…?!

…ありえない。

来年は受験だし　今年は遊びまくろうと思ってたのに

ん？宿題？

もちろんそんなの後回し

…のハズだったのに…

なんでこうなるのさ？！

まあ ヤツが口うるさいのはいつもの事だけど…。

でも 去年の夏休みはここまでじゃ無かったのに…

ああ… そっぴやヤツ去年は受験生で朝から夏期講習に行ってた居なかつたんだ…。

ああ 平和な夏休み… かむばっく…！

でも…

やっぱり シュウには逆らえないんだよね。

惚れた弱味ってヤツ？

ヤツに嫌われるのはイヤだし…。

何より逆らったら後が怖い…

お母さんも完全にヤツの味方だしね。

「おはよ〜」

しぶしぶ起きた私がリビングに入っていくと…

「おそよづこざいます」

ソファで新聞を読んでるシュウしか居なかった。

「あれ？お母さんは？」

「母さんならもうパートに行きましたよ」

ああ そっか パートね…。

…って事は コイツと二人つきり？

変に意識しちゃって 勝手に心臓がドキドキしだした。

「コッ コーヒーでも飲む？」

「ええ、じゃあ頂きます。」

少し気分を落ち着けようとコーヒーを淹れる私。

「はい。どうぞ」

バサツと読んでいた新聞をたたみ、コーヒーを受け取ったシュウは

「ありがとうございます」

そう言うてにこつと微笑んだ。

うわっ 滅多に見れないシュウスマイルツ！

笑うと可愛いんだよね…。コイツ

うう…なんか照れる。

マンガに描いたら キラキラしたバックを背負ってそうな シュウの笑顔に焦った私は自分の分のコーヒーを落としそうになってしまった。

「うわぁっ」

「大丈夫ですか？姉さん。ほんとドジなんですから…しょうがない

なあ」

…。

誰のせいだと思ってんのよ…。
人の気も知らないで…

私を見ながら くすつと笑うシュウを見て

『ああ やっぱ好きだなあ』

なんて思ってしまう私。

かなりの重症なのかもしれない。
これが恋の病ってヤツ？

ねえ シュウ…

私の気持ち知ったらどうする？

やっぱり迷惑…かな？

「食べ終わったら勉強が待ってますからね。早く食べちゃって下さい。」

私がこんな事思ってるなんてこれっぽっちも思っていないんだろうな
あ…。

なんかコーヒーがいつもより苦く感じた。

「姉さん…。また手が止まってますよ。」

「すみません…。」

こうしてシュウに起こされ勉強をするハメになった私。

当然 まだ寝ぼけて頭に勉強なんて入る訳もなく…。

ボーっとしながら 熱心に勉強しているシュウの横顔を見つめていた。

「僕の顔に何かついてます？」

うわっヤバい見とれちゃってた

「うつ　うつん。ついてないよ。ただ…」

「ただ？」

「綺麗な顔してるなあゝって思ってた…。」

「なっ…。いきなり何言い出すんですかっ?!」

…あ。ちよと照れた？
可愛いところあるかも…

「くすっ…照れてる？」

「くだらない事言っていないで勉強に集中して下さいっ」

誤魔化す様に声を上げるシュウ

「だってえ…。眠くて頭に入らないよ…」

「分からないとこあった教えますから…。」

…年下に 勉強教えて貰う私って…

ちよつと悲しくなってきた。

…カリカリ。

しばらくシャーペンの音だけが部屋に響く

「あのさ…」

「なんですか？」

「明日の夜…暇？」

思い切つて聞いてみた。

明日は…

「明日の夜ですか…？」

ああ明日は風紀委員で夏祭りの見回りをする予定ですが…」

「?…見回り?」

なによそれっ?!

一緒に行きたいなって思ってたのに…。

「ええ…。夏休みだからって祭りで夜遅くまでハメを外さない様にと…。僕が提案したんです。」

この ド真面目男ー!!

私は心の中で涙を流す

「そっか…。頑張ってね。」

明らかに落胆した声を出した私に

「どうかしました?」

…なんて聞いてきた。

鈍感男め…。

普段は勘がするどいくせに 恋愛事になると 鈍いシュウ。

まあ 気付かれても困るんだけどね。

「なんでもないっ」

私は 半分自棄になりながら 問題集にかじりついた。

「姉さんは行くんですか？」

珍しくシュウが手を止めて聞いてきた。

「そのつもりだけど…。シュウには関係ないじゃん。」

つい キツイ態度を取ってしまう私

ああ なんて こうなるんだろ…。

「誰と行くんですか？」

「…ひとりで」

問題集に目を向けたまま、ぼそつと答える

あーちゃんは 彼氏と行くらしいし…。
シュウと行こうと思ってたので他の友達とも行く約束はしてなかった。

「じゃあ一緒について行きますね。
姉さんだけだと無駄使いしそうだし…。ドジやらかしそうで心配ですし…」

へ？

「だって見回りは？」

思わず顔を上げてシュウを見た

「見回りは20時からなのでそれまでですが…」

「うんっ わかった」

やったあー

心の中でガッツポーズしながら、我ながらいい笑顔で返事した。

「あれ？なんか機嫌直りました？
姉さんお祭り好きですね」

苦笑しながら 納得しているシュウ

やっぱ 鈍いなあ コイツ…。

私はアンタと行けるから嬉しいのに…

まあいいや 一緒に行けるんだし…

「ただし…きちんと勉強を終わらせないと行かせませんからね。」

うわっ やっぱり？

私は それから今までに無いくらいに必死に勉強した。

第三話 鈍いやツ（後書き）

読んで下さりありがとうございます

次回は お祭りの話書く予定です。
なるべく早く書きます… 多分

第四話 照れるヤツ（前書き）

続きすぐ書くつもりが やっぱり間が開いてしまいました。
ほんとこんななんですいません

第四話 照れるヤツ

カラン コロン カラン

「姉さん……。そんなに走ると転びますよ……。」

「だって楽しいんだもん」

動きにくい浴衣を着ているにも関わらず 自然と早足になってしま
う。

シュウと一緒にっつてもあるけど お祭り好きな私は浮かれながら歩
いていた。

主に屋台が目当てなんだけどね

私の心は 既に祭りの会場である神社にトリップ中。

「なに食べようかなあ〜」

カランコロン

ガッ

「きゃっ」

「姉さんてほんと予想通りの行動してくれますよね。だから先程注意したんじゃないですか…。」

排水溝の蓋に開いた穴につまづいた私の手を寸での所で掴んでくれたシュウのおかげで倒れずにすんだ…。

「すみません…」

呆れながら 説教をしてくるシュウ

うう これじゃあどつちが 年上だか分からないよ…

「大体ですね…。せっかく浴衣を着てるんですからもつとお淑やかに行動した方が…。その…：：：せっかく似合っているのに…。」

ん？ 今 最後にぼそつと何か言わなかった？

そう思つて シュウの顔を見ると いつものポーカークフェイスが何処となく赤くなつてゐる気が…

…って事は 今のは聞きまちがいじゃないよね？

「ふふっ…ありがとう」

私がそう言つと シュウの顔が更に赤くなる。

普段 あんまり女の子と接しないシュウは 例え姉であつても女性を褒めるっていう行為は照れるらしい。

うわっ 可愛い…。

もつとからかつてやりたい気もしたけど 丁度祭りのある神社へ到着した。

鳥居を潜ると参道の両端にはたくさんの屋台が並んでおり その上に飾られた提灯が祭りの雰囲気盛り上げていた。

「シュウ〜 見て見てっ！綿菓子あるよっ！あっ！リンゴ飴もっ！わ〜いバナナチョコ発見っ！」

「食べ物ばかりですね…。先程夕飯食べたじゃないですか…」

「こういうのは別腹なのっ」

「…お腹壊さないで下さいね。」

呆れながらも笑うシュウ。

シュウの笑顔を身近で独り占め出来るなんてやっぱり姉で良かったと思う。

ほんとは恋愛対象になれたら一番だけど…。

「満足満足っ」

両手に リンゴ飴と綿飴を持って、さっきバナナチョコと杏子飴と焼きとうもろこしを食べ終えた私はにこにこしながら言った。

「それは あれだけ食べれば満足ですよね…。」

苦笑するシュウ。

手にはさっき二人でやった金魚掬いの金魚を持っている。

私は全然掬え無かったのに、シュウはひょいひょいと5匹も掬っていた。

昔から器用になんでもそつなくこなすんだよね…コイツ

「疲れたあゝ」

そう言つて神社の石段の脇に座つた私は　そこで屋台に目を向けあ
るものを発見した。

「あつ！そう言えばまだジャガバタ食べて無いゝ」

「まだ食べる気ですか…？」

「だってゝせつかくお祭りなんだから食べておきたいじゃん?!」

「だってじゃありません。そろそろ止めて置いた方が…。」

あれ？顔が引きつってるよ…シュウ

「シュウの意地悪ゝ」

「意地悪つて…　僕は姉さんの為を思つてですね…。」

……。
…あゝ　分かりました。僕が買ったのを一口あげますから…そんな

目で見ないで下さい。」

私のじいっつという視線に耐え兼ねてシュウが折れた。

食べ物への恨みは恐ろしいのだよ　シュウくん（笑

「じゃあ買ってきますからそこに居て下さいね。」

「はい」

我ながらいい返事だと思う。

「あれ？倉橋じゃん…一人か？」

「ん？ああ、田崎かあ…。一人じゃないよ。弟と一緒に」

いきなり　私に話かけてきたこの人は…

たさき　はるひと
田崎　春人

私と同じクラスで席も後だからたまに話たりする男の子。
茶色の肩まで伸ばした髪は軽くウェーブがかつていて、私服を見た
のは初めてだったけど　今風な格好をしていた。

ポロシャツにジーンズな姿のシュウとは対象的な感じがする。

「ああ…。あの『堅物くん』な…。
そっついや姉弟なんだよな…。」

「義理だけどね…」

「大変だなあ… お前も…」

「へ？」

私の頭の上に？マークが浮かぶ

「アイツ口うるさくね？家でもああなんか？」

「うーん。まあ…」

私にとっては ヤツと関われる事は嬉しい事なんだけど…

田崎は その外見と生活態度から 風紀委員に目を付けられているらしく どうやら シュウの事が苦手みたいだった。

「ところで、田崎は何してたの？一人？」

「俺をそんな淋しいヤツみたいに言うなよ……。一人じゃ祭り来ねえし。ダチと一緒に来たんだけどはぐれちまって……。」

「迷子？」

私がぶつと笑うと 田崎が慌てた。

「ちげっ！アイツらが勝手に居なくなっただって……。」

「姉さん？」

声に気付いて振り向くと ジャガバタを手にしたシュウが立っていた。

「あっ！シュウおかえり〜」

言って私はジャガバタに飛び付く

「お知り合いですか？」

「うん。同じクラスの…」

「ああ…田崎さんですね。お久しぶりです。いつも姉さんがお世話になっております。」

私の紹介を遮り　ぺこっと頭を下げながら　シュウが田崎に挨拶する。

「お世話って…俺別に何もしてねえケド…」

田崎が苦笑する。

「あつ！そろそろ行かなくては…。」

腕時計を見ながら　いきなりシュウが慌てだした。

え？もう時間？

そう思って　携帯で時間を確認したら…

19時30分…

確か　見回りって20時からじゃ…？

相変わらず 時間に律義なヤツ…
もっと一緒に居たかったのに…。

「ところで田崎さん今お時間ありますか…？」

がっかりしながらも まだジャガバタを食べ続ける私をよそに シュウが田崎に話かける。

「ん？まあ仲間とぶらぶらしてただけだから暇っちゃ暇だな…」

「そうですか。ではお願いがあるのですが…」

「…な なんだよ…。」

シュウからの頼みと聞いて ちょっと警戒してるらしい。
どもりながらも 田崎が答えた。

「実は僕これから風紀委員で見回りをする事になっていまして…。
よろしければ姉さんを家まで送って行って頂けると嬉しいのですが…。
家までは10分くらいの距離ですので…」

「おう 別にいいけど…。ところで見回りって？」

「祭りで生徒がハメを外して飲酒や夜間徘徊を行わない様に指導して回ります。10時以降出歩いていると指導対象になりますよ」

「マジでか？」

一瞬田崎がやばって感じの顔になる。

「ええ…。ですから姉さんを早めに連れて帰ってくれと助かります。」

本当は僕が一度送って帰るつもりだったのですが予想外に時間が経ってしまいましたので…。」

「…そうか… 分かった任せとけ」

「ありがとうございます。助かります。
このお礼はいつかしますので…。」

「なら、こないだの遅刻見逃してくれよ。」

「それとこれとは話が別です。」

「…だよな」

「では僕はこれで失礼します。

姉さん、僕の分のジャガバターは家に持っていったておいて下さい。
あんまり食べ過ぎちゃ駄目ですよ。

後、家には早めに帰る様に…。」

「はい。分かりました。」

私が返事すると シュウは 「では」と田崎に一礼して去っていった。

第四話 照れるヤツ（後書き）

読んで下さってる皆様いつもありがとうございます。

第五話 出番なしなヤツ（前書き）

また 間が…

しかも 今回 シュウ君出て来ないし…

こんなんですが もうしばらくお付き合い頂けると嬉しいです

第五話 出番なしなヤツ

「うしっ んじゃ帰るかっ！
それとも、もうちょい見てくか？」

田崎が振り向きながら声をかけてきた

「うゝん もうちょっと見たいかも…」

まだかき氷食べてないし

でもこれ以上食べたならシュウに怒られそうだなあ…
一緒に居れないのは淋しいけど 行ってくれてよかったかも…

「おう！ んじゃ行こうぜっ」

田崎が にこにこしながら言う

いつも学校で見る田崎と違って今は無邪気な子供みたいな感じ…

こんな顔もするんだあ…

「なんか楽しそうだね？ お祭り好きなの？」

「おう めっちゃ好き
なんか意味なくワクワクしねえ？
それに…」

「それに？」

「あつ いや… なんでもねえ…」

顔を逸らしながら 田崎が慌てる
暗いから表情は見えないんだけど…
どうしたんだろ？

「なあゝに？途中で止めないでよ。
気になんじゃん」

「気にすんなって…」

「まあいいや。あれ？そうだ…
ねえ田崎 一緒に来てる友達はいいの？」

「やべっ 忘れてたっ ちょっと待っててな」

そう言っていると 田崎はポケットから携帯を取り出し何処かに電話し始めた

「俺……わりいちょっとな……」

ああ?! 迷子だあ?! おめえらが勝手に居なくなっただろ?

……… それより今日の飲み中止にした方がよさそうだが……… なんか風紀の見回りはいるらしい……… おう……… んで悪いんだけど俺用事出来たからもう帰るわ……… おう……… んじゃな」

… パタン

電話を切ると 田崎が振り返って

「スマン。待たせたな」

って謝りながら携帯をしまう

「ううん。それよりほんとにいいの? 友達……」

「いいんだって……… どうせ今日は酒飲めねえし……… それに俺 あんなムサイ奴等より可愛い女の子といった方がいいしっ」

「あははは」

「あ…そこ笑うとこなんだ…」

「…ん？」

「いや…何でもねえ
それよりどこ行く？」

「私かき氷食べたいな〜
あっ！見て見て田崎っあれ可愛い〜」

そう言って 私が指差したのは 射的の屋台に並んでるくまのぬいぐるみ

「…ん？オツケー！んじゃ取ってやるよ」

「田崎 射的出来んの？」

「任せとけて」

田崎は 全弾命中させてじわじわとぬいぐるみを後に動かしていき
最後の一発で見事に落として

「やったあゝ すごい」

飛び跳ねて喜んでた私に

「ほら…」

って くまを手渡してくれた

「ありがとう」

私が大喜びで受け取ったら

「どういたしまして」

田崎がにっこり笑いながら言った

…うわ

思わず見とれてしまっていた

だって屈託なく笑った田崎の顔は格好良くてまぶしくて…

…って 何やってんだろ私…

シユウ以外の人にドキドキするなんて…

「んじゃあ次行くか？かき氷食いたいんだろ？」

「う…うん」

うわぁ…どもちゃったよ…

田崎変に思っていないかな？

「おつ あったぞ…何食う？ブルーハワイとか口ん中真っ青になんだよな」

無邪気にはしゃいでる田崎

良かった…あんまり気にしてないみたい

* *

「そろそろ帰るか？」

あんま遅くなると堅物くんに怒られちゃうしな……」

「うん。そだね」

そう言って 私達は 神社を後に歩き出す

カラン コロン

……

なんだろ？この沈黙……

田崎さつきまで騒いでたのに……

なんかしゃべってよ……

「……あのさ 倉橋……」

「ん？」

「俺さ……」

「なあに？」

「好きだ…」

へっ？

「何を？」

「だから倉橋の事…」

はっ？え？何？

「…え？」

「あゝだから…」

…俺…倉橋が好きだ」

「…へ？…わ…私？」

「お前以外に誰が居るんだよ…」

照れてちよつと赤くなりながら ガシガシ頭を掻いてる田崎を見る
と…

冗談じゃない…よね？

どうしよう…

「あ…う…え？」

自慢じゃないけど生まれてこのかた告白なんてされた事なんかなく
て…

いきなりな状況に頭パニックな私

頭が真っ白になって何て言っているのか分からない

でも 私が好きなのは シュウだし…

きちんと田崎に言わなきゃ…

そう思っと思いつて口を開いた

「あの…」

「あつ　ちよつ　待てつ　まだ返事しないで…」

「…え？なん…で？」

「ごめんな…ちよつと考えてから返事くれると嬉しいんだけど…」

そつすりやその間は、俺…ちよつとでも倉橋の心の中に居れるだろ？

…なんてな…ただ今返事聞くのが怖いだけ…俺　カッコ悪いよな
…」

「…たざき…」

「あつ！お前んちここだろ？
んじゃ　俺もう行くな」

「えっ？なんで私んち知ってんの？」

確か田崎　ウチには来た事ないハズ…

「ん？えっ？ああ…

あの…な

倉橋ちよつと前に風邪で学校休んだ事あったじゃん？」

「うん」

確か… 2カ月くらい前に私は風邪をこじらせて一週間くらい学校を休んだ

「その時に…さ 心配になってな…で、クラスの女子にお前の家聞
いて見舞いに行こうとしたんだ…」

…あれ？でも田崎 見舞いに来てないよね…

「…けどな いざ家の前まで来たら…チャームが押せなくてさ…」

「…」

「家の前ウロウロした挙句逃げ帰った…。

ストーカーかよって感じたよな…

ごめん…キモいよな…ははっ」

自嘲気味に笑う田崎

…知らなかった

田崎が私の事そんなに心配してくれてたなんて…

「うっん…ありがとう」

私の事を思ってくれてた田崎の気持ちが嬉しくて 私はにっこり笑ってそう言った。

「じゃ…じゃあ俺帰るから…返事はいつでもいいからな…
じゃあ…またな」

そう言いながら 走って帰って行く田崎の後姿を見送りながら 私は知らないうちに真っ赤になっていたほっぺたを押さえた。 私

第五話 出番なしなヤツ（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

第六話 心配性なヤツ（前書き）

間が開き過ぎですね…

しかも 文章が少し？変な気が…

更に 内容 進展してません。

すみません

m (| |) m

第六話 心配性なヤツ

どうしよ…

どうしよ う どうしよ

どうしよー！

告白… されちゃったよ…

いきなりな事態に呆然としていた私は どうやって戻ったのか思い出せないケド いつの間にか自分の部屋のベットにペタンと座っていた。

「ゆきー！いるの？」

カチャ…

部屋を開けてお母さんが入って来ても うわの空な私

「なんだ…帰ってるならちゃんと返事しなさいよ…。ただいまも言わないで…」

秀人から 何度も連絡あったのよ。

『姉さん帰ってますか？』って…

アンタ 弟に心配かけてんじゃないわよ。

…聞いてるの？

…って あら？

アంత顔赤いケド熱でもあんの？」

「だっ 大丈夫…。」

シユウには私から携帯にメールしとくから…」

「ほんとに大丈夫なの？」

「うん。平気

あつ…なんか疲れちゃったから今日はもう寝るね…
おやすみい」

ふう

心配するお母さんを部屋から追い出し 盛大な溜め息をつきながら
ベットに倒れ込んだ。

あっ そうだ…

シユウに連絡しなきゃ

寝転がったまま バッグから携帯を取り出して開くとと真っ暗な画面…

あれ？ 電源きれてる…
なんで？？

慌てて携帯の電源ボタンを押すと
『充電して下さい』の表示…

ヤバイ 電池ないし…
充電しなきゃ…

携帯を充電機に置き、仰向けに寝転びながらぼつと天井を見つめてたら…

『…俺…倉橋が好きだ…』

ヤバイ…思いだしちゃったよ…

頭にさっきの 田崎の言葉が甦ってきて 更に顔が赤くなるのが分

かる。

田崎… あれは 冗談じゃない… よね？

田崎は 私にとって ただのクラスメイトで、たまに話すぐらいの
友達…とも言えない様な関係…

なのに…

だったハズなのに…

さつきから 頭ん中に浮かんでるのは お祭りではしゃぐ田崎の笑
顔…さつきの言葉…

私どうしちゃったんだろ…

いつも私の頭の中に居るのは たまにしか見せないシュウの笑顔な
のに…

シュウ… 私 どうしちゃったのかな…？

* * *

ガチャ

「ただいま」

「あら秀人おかえり お疲れ様」

「姉さん帰ってますか？」

「ええ…帰って来てるわよ…
あら？連絡なかった？」

「いえ…
でも無事に帰ってるんですね…。良かった」

「あの子ったら連絡しなかったのね…
いつも心配かけてごめんね。まったくどっちが年上か分かんないわよね」

「いいえ。大事な姉さんですから心配するのは当たり前ですよ。
…もちろん母さんもですよ。」

「あら～ありがと」

あつお風呂沸いてるから入っちゃってね」

「はい。分かりました」

……

…ん？

今何時…？

階下からぼんやりと聞こえる会話で私は目を覚ました。

あれ？いつの間にか寝ちゃってたんだ…。

シュウ 帰って来たのかな？

トントン

ぼんやりした頭で考えていると 部屋をノックする音とシュウの声

「姉さん…入りますよ」

「うん。どつぞ〜」

「姉さん。携帯繋がらなかったんですが電源切ってたんで…」

そう言いながら 部屋に入って来たシュウは 私の顔を見ると何故か言いかけた言葉を止めて ぱっと顔を逸らした。

あれ？どしたんだろ？
シュウ 顔赤いし…

「ね…姉さん」

「ん？なあに？」

「…なんていう格好しているんですか？」

「…え？」

言われて 自分の格好を見ると
乱れた浴衣にはだけた肩…胸元も見えそくに開いている。

バツ

急いではだけている浴衣を直した

「ごっ ごめ…

なんか浴衣のまま寝ちゃってたみたいで…

…で、何か用？」

そう言うと シュウは 赤らめた顔を逸らしたまま

「いつ いえ

姉さんが無事に帰って来たのなら別にいいんです。じゃあ僕はこれで…

あっ お風呂沸いてるみたいですから先にどうぞでは、おやすみなさい」

と 言つと慌てて部屋を出て行った。

…

…… / / /

何やってんだろ…私…

いくら ぼつっとしてたからって シュウにあんな格好で…

……
でも 慌ててるシュウ ちょっと可愛かったな…

…なんて
何考えてんの 私…

シュウ…

ドキドキしてる心臓に やっぱ シュウが好きだなって再確認する

私の中で シュウの居ない人生なんてありえない。

…でも
だけど…

常にシュウで一杯なハズの私の胸の中の 端っこに映る田崎の笑顔…

なんでだろ？

初めて告白なんてされちゃったからだよね…きつと

だあゝ もうっ

考えてたってしょうがないしっ

お風呂入って寝よ…

第六話 心配性なヤツ（後書き）

読んで頂きありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7200a/>

弟なヤツ

2010年10月28日04時25分発行